

## 戦場にさ迷う日々

東京都 長井 精子

フィリピンは常夏の国、全島天然資源が豊富で、海岸線は美しく、東洋の真珠といわれ、昔から彼の地に移住して現地の人と共に産業、農業等文化をひろめ、生涯の安住の地と定めた人は多く、第二次大戦当時は、全島で七・八千人の日本人が在住していました。

私は当時二十一歳で、鉱山会社に勤務する夫とマニラの郊外、サンタメサに住んでいました。昭和十九年九月二十一日、米軍機の大空襲でマニラ湾に停泊中の日本の輸送船、軍用船のすべてがやられ、市中はにわか騒然となりました。この日をさかいに、兵役のある者はマニラ防衛隊、自衛隊又は徴用となり、きたるべき比島戦にそなえて、市街はバリケート、トーチカが造られ、美しい町は一夜にして戦場の様相を呈しました。

夫が現地召集を受けて、マニラ防衛隊第二大隊に所属したのは、十九年十月始めだったと思います。戦場と化した市中に、米軍の落下傘部隊が降下するとか、本土決

戦を一日でも引きのばすために敵を市中に迎え入れる等の流言飛語に、現地のフィリピン人は「マッカーサー元帥が帰ってくる」とひややかな目で私達を見ていたようでした。

一か月ぐらいでマニラにもどれるであろうと、十九年十二月二十四日、クリスマスイブに約三千人の婦女子は、汽車やトラックで、ルソン島東北部に疎開しました。これとあい前後して、マニラ市中に一部の部隊を残し、軍も山岳地帯に撤退しました。マニラより三百キロぐらい北上した山村ボンファルに定着、小グループにわかれ、学校、病院、民家に分散して、共同生活が始まりました。

私は二十年一月十六日、そのボンファルで、長女比登美を出産しました。平時であれば、溢れるお乳で育つたと思われるのに、一滴の乳も出なくなり、マニラから疎開荷物として持ってきた残り少ない衣類や、目ぼしい物をつぎつぎに比登美のミルクやお米と交換して、幼い命をはぐくんで、一日中防空壕のそばですこす毎日でした。

街道を足早に通過する兵隊さんの沈黙の列に戦況を一喜一憂しつつも、比登美を抱いてマニラに帰り、にこや

かに会い見る夫との再会を夢見る日々でした。しかし、米軍はバレット峠を越えて、身近に迫り、ボンファルは包囲され、軍、邦人共々、大移動が始まりました。五月下旬だったと思います。

マニラから一緒だった、宮北さん親子三人と、私、比登美の五人は、最後の軍のトラックで、迫撃砲に追われながらボンファルを出ました。折からの雨季にアシン川ははんらんして、橋は流され、武器、食糧を捨て、敗走の軍は、傷病の戦友をも置き去り、北上しました。在留邦人婦女子も取り残され、親子手をつないで濁流にのまれ、あるいは空爆の目標にされ、しゃへい物のない草原に、右往左往するさまは地獄絵を見るようでした。

キャンガン（終戦の調印をしたところ、海拔千メートル、マニラより三百六十キロ地点）で六月十五日、比登美は生後六か月の小さな幼い命を終えました。キャンガンも米軍の砲弾が落下するようになり、比登美を教会の庭に埋葬して去りました。比登美と共にすごしたあわい思い出は、今も私の胸に残っています。

一人になってから、宮北さん親子ともわかれしました。

自分だけの食糧を探すのも困難になり、手持の米もなくなり、野草でも、なんでも空腹を満たすものを求めて、歩き、暮れゆく山の峰に雨雲がはいだし、野宿の場所を探す頭上にアメリカ軍偵察機の爆音が響き、黒い大きな翼の影がおおいかぶさる。

雨にうたれ、道端で、ずぶ濡れのリュックサックから持ち物を捨てながら歩いてきた、その時、マニラの自宅の近くに住んでいた仲良しの沢田園子さんに会った、マリアに苦しむ彼女は、三日おきに発熱してガタガタふるえ、口もきけなくなる。二人は一枚の毛布にくるまわって、現地人の小屋（フィリピン人はもつと山奥に逃げていた）に身をひそめたり、ときには枯草を集めて敷き、野宿をしながら、どこへ行くともなく、人の行くほうへ、兵隊さんの行くほうへとさまよい、一枚しかない毛布は天幕にもなった。夜半から降り出した雨に枯れ草は水を含み、たちまち衣服を濡らす、水筒や飯盆に腰をかけて、うづくまり、朝を待ち、果てしない避難行を続け、やがてホヨの谷間に、ここが最後の逃げ場所と決めた。終戦も間近い八月の始めであつたと思う。

八月十八日頃、戦争は終わった。停戦であると、ホヨの谷間で聞いた。空爆と大砲を打ちこむ山鳴りは聞こえなくなったが、空腹とむなしさは以前とまったく変わらない。身近に芋畑（現地人が山の段々畑にサツマ芋をつくっていた常食）も野草もないこの谷間は、敵機を見ることはなかったが、死の谷間だった。死者を埋葬する場所もなくなった。また穴を掘れる元気な人もいなくなった。

終戦のため、集結移動があるので、元気なもの十人ぐらいで、フンドアン（平地に米をつくっていた）まで稲穂をつみに行った。谷間をよじのぼり、道路上に出た、一か月振りであった。しかし、日本への帰国の道はまだ遠く、二十年十月二十一日、やっとの末、呉港に引き揚げ船で帰国した。

夫はマニラ市街戦で最後まで戦って戦死したと厚生省の公報に記されているが、定かではない。

いまここに、生死をさまよった日々はどうしてきたのだろうか。……

私は生きるための努力を惜しまず、なまけず、川があれば手を洗い、顔を洗った。深みに行って飲み水を汲み、

歩きながらも枯れ枝を打って炊飯の薪に心がけ、火つけ用は濡れないように胸元に入れて、食べられる草を物色しながら歩くように努めた。書いてみるとピクニックでもしているようだが、息はあえぎ、棒のようになった足は自分の手で持ちあげなければ歩けない。山なみにひびく砲弾のすさまじい音に心臓の鼓動は早鐘のように打ち、死者のにおいのただよう泥沼路は、恐怖に自分も吸いこまれそうになる、もう立ちあがることもできない人が、うつろな目を見張り、水を求めて足元にすがる、私は水筒に手をかけて、私自身は水をあげよう、と思う。しかし、もう一人の私は、ここで水をあげてしまったら、いつ、どこに川があるか知れず、いま持っている水だけで今夜は過ごさねばなくなるかも知れない。心を鬼にして通り過ぎる。私も今にあの人と同じになるかも知れない、そのときは誰が助けてくれるだろうか、みんな通過してしまうであろう。炊飯のできる場所を探そう、夜露をしのぐ小屋を見つけよう。

もう駄目だ、死んだほうがまだ、と言っては、一歩も進まず、ところかまわず糞尿をもらす人もある。あき

らめは一步、一步死への旅路を急ぐことになる。フィリピン、ルソンの山にくり広げられた、将兵、民間人ともに入りまじった悲惨な死の行進であった。しかし、いかなる場合でも、不撓不屈の精神力と、適切なる判断と人間としての節度ある行動こそ、自己の健康を維持し、ささやかな明日への希望を見いだすことこそ生還し得たことと思う。もちろん、運と、奇跡、また神佛の加護によることは平時にあっても言うまでもない。

## 苦しい体験をとおしての願い

福岡県 山下 幸美子

ある日突然、いつも勲章や肩章を沢山つけて馬上に乗りしくまたがっていたその人が、私の屋敷の裏庭に穴を掘り始めた。

軍職を表すすべての物をその穴に葬り始めたのだった。子供心にももったいないと思った。私の前に、終戦はそんな形でやってきた。そう、あの日から一転して私の

頭上で、神は大変な運命のいたずらを始めたのだった。

軍職にあった人は、中国人によって石つぶでの攻撃を受けたと聞く。幸いにも、わが家は日本人の幼稚園の跡地で、中国の子供たちとの格好の遊び場であり親父も深かった。今でもありありと思ひ出す。正月がくるたびに、日本の飛行機は『おめでとう』と書いたピンクやブルーや白のチラシを空いっぱいにまき散らし、風に舞うそれを日本の子供たちも中国の子供たちも夢中で追いかけたものだった。

生活は一変した。中国服のまま、日本には帰らないとあいさつに来た人が何人いたか覚えていない。数日後、編み上げ靴をはかされ、歩行訓練が始まる。引き揚げるために足を鍛えた。

いよいよその日 came。中国人も日本人も泣きながら、「さらば済南よ、また来る日まで……」と、ラバウル小唄の節で歌った。父と兄は船に乗るまで歩かされ、母は弟が一歳だったために保護されて先に行き、六歳の私と四歳の妹がとり残されて民間の大人たちと一緒にだった。女性丸坊主に頭を刈り靴の上から靴下をはくという男装